

第2回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議
（「認知症を知る1年」報告会）

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005
表彰式・地域活動報告会

■日時：平成18年2月4日（土）九段会館



主催：認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005実行委員会

第2回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議(「認知症を知る1年」報告会)
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005 表彰式・地域活動報告会

プログラム

◆第1部(「認知症を知る1年」報告会)

開会	堀田力(認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議議長)
来賓挨拶	磯部文雄(厚生労働省老健局長)
「認知症林」100万人キャラバン	菅原弘子(全国キャラバン・メイト連絡協議会)
「認知症の人『本人ネットワーク』支援」	勝田登志子(呆け老人をかかえる家族の会副代表理事)
報 「認知症の人や家族の力を活かした	永田久美子(認知症介護研究・研修東京センター主任研究主幹)
ケアマネジメントの推進」	
告 『認知症になってもだいじょうぶ』	柴山漢人(認知症介護研究・研修大府センター長)
町づくりキャンペーン2005」	
100人会議の今後の活動について	認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議 事務局
若年認知症患者からのメッセージ	彩星の会
“シャンソンにのせて”	

◆第2部(「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005表彰式・地域活動報告会)

開会	堀田力(「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005選考委員長)
来賓挨拶	赤松正雄(厚生労働副大臣)
厚生労働大臣奨励賞表彰	表彰:赤松正雄(厚生労働副大臣)
	受賞:「『小山のおうち』の実践10年と『交流塾』の展開」医療法人エスポアル
	出雲クリニック 重度認知症老人デイケア 小山のおうち(島根県出雲市)
	施設長 高橋幸男
認知症介護研究・研修センター	表彰:長谷川和夫(認知症介護研究・研修東京センター長)
奨励賞 表彰	受賞:「若年・軽度認知症専用自立型デイサービス『もの忘れカフェ』から
	みえてきたもの」医療法人藤本クリニック デイサービスセンター(滋賀県守山市)
	デイサービスセンター所長 奥村典子
表 呆け老人をかかえる家族の会	表彰:高見国生(呆け老人をかかえる家族の会代表理事)
奨励賞 表彰	受賞:「介護家族の交流・研修と認知症の理解を地域に広めるための発信」
	阿倍野介護家族の会・えがおの会(大阪府大阪市阿倍野区)代表 横尾禮子
彰 住友生命保険相互会社奨励賞	表彰:横山進一(住友生命保険相互会社取締役社長)
表彰	受賞:「共生型グループホームながさかの実践~年齢や障害を越えて、誰もが地域で
	暮らし続けるために~」社会福祉法人白石陽光園(宮城県白石市)八島浩
特別賞表彰	表彰:長谷川和夫(「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005)実行委員長)
	受賞:「SPSD(認知症模擬演技者)による支援プログラムづくり」
	特定非営利活動法人AL・リキア・たすけあい(東京都世田谷区)香丸眞理子
	受賞:「発信!『忘れても、しあわせ』の思い」認知症本人・小菅マサ子&介護家
	族・小菅もと子&地域の人たち(愛知県豊明市)小菅もと子
	受賞:「認知症こそマリアプラン『あたまの整理箱』『マリアプランの玉手箱』の作成」
	全国マイケアプラン・ネットワーク(東京都府中市)島村八重子
厚生労働大臣奨励賞	紹介:北良治(北海道奈井江町長)
紹介、発表	発表:医療法人エスポアル出雲クリニック 重度認知症老人デイケア 小山のおうち
認知症介護研究・研修センター	紹介:小宮英美(日本放送協会解説委員)
奨励賞 紹介、発表	発表:医療法人藤本クリニック デイサービスセンター
呆け老人をかかえる家族の会	紹介:長嶋紀一(認知症介護研究・研修仙台センター長)
奨励賞 紹介、発表	発表:阿倍野介護家族の会・えがおの会
住友生命保険相互会社奨励賞	紹介:中島紀恵子(新潟県立看護大学学長)
紹介、発表	発表:社会福祉法人白石陽光園(宮城県白石市)

本日(1部、2部全体)のまとめ

長谷川和夫(認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議幹事、
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005 実行委員長)

(閉会後に会場内で、第2部の奨励賞・特別賞受賞者の方を中心とした情報交換会を開催)

目 次

I. 第1部 「認知症を知る1年」報告会

- | | |
|---|----|
| 1. 開 会 (認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議議長 堀田力) | 4 |
| 2. 挨 拶 (厚生労働省老健局長 磯部文雄) | 5 |
| 3. 年間活動報告 | |
| 1) 報告1 「認知症サポーター100万人キャラバン」 | 6 |
| 2) 報告2 「認知症の人『本人ネットワーク』支援」 | 7 |
| 3) 報告3 「認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進」 | 9 |
| 4) 報告4 「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2005」 | 11 |
| 5) (資料) 啓発活動の拡大および広報活動 | 12 |

II. 第2部 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005

表彰式・地域活動報告会

- | | |
|---|----|
| 1. 挨 拶 (「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005選考委員長 堀田力) | 13 |
| (厚生労働副大臣 赤松正雄) | 13 |
| 2. (資料) 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005の概要 | 14 |
| 3. (資料) 全国から寄せられた地域活動一覧(受付順) | 16 |
| 4. 奨励賞、特別賞表彰式 | 17 |
| 5. 奨励賞活動報告 | |
| 医療法人エスポアール出雲クリニック重度認知症老人デイケア 小山のおうち(島根県出雲市) | 19 |
| 医療法人藤本クリニック デイサービスセンター(滋賀県守山市) | 20 |
| 阿倍野介護家族の会・えがおの会(大阪府大阪市阿倍野区) | 23 |
| 社会福祉法人白石陽光園(宮城県白石市) | 25 |
| 6. (資料) 特別賞活動紹介 | |
| 特定非営利活動法人アビリティクラブたすけあい(東京都世田谷区) | 28 |
| 認知症本人・小菅マサ子&介護家族・小菅もと子&地域の人たち(愛知県豊明市) | 29 |
| 全国マイケアプラン・ネットワーク(東京都府中市) | 30 |
| 7. 本日のまとめ 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005実行委員長 長谷川和夫 | 31 |
| 参考資料1【100人会議の趣旨・役割】【認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議宣言】 | 32 |
| 参考資料2【「認知症を知る1年」キャンペーンの事業】【認知症サポーターについて】【シンボルマークについて】 | 33 |
| 参考資料3【「認知症を知り 地域をつくる10ヵ年」の構想】 | 34 |
| 参考資料4【認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議会員名簿】 | 35 |

I. 第1部 「認知症を知る1年」報告会

1. 開 会

認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議議長 堀田 力

堀田でございます。

ようこそいらしていただきました。今日は寒い日で、テーマは認知症という地味なテーマであります。これだけの皆様方に集まっていただきましたことに感激いたしております。



この100人会議、「認知症を知る1年」キャンペーンが去年の7月にスタートいたしまして、本当にびっくりするほど活動が広がっております。ここでもやってくださる、あちらでもやってくださると、驚くほどに全国のいろんな地域で認知症の方々を支えようという運動が盛り上がり、サポーターの方がオレンジリングをはめていて下さいます。格好よくつけていてくださるところを見て本当に感激いたしております。はっきり言いまして、100人会議会員をやってくださる方は無償で貴重な時間を提供して下さって、今日も前列に時間単価のたいへん高い方々が無償で参加していただいて(笑)、発言の機会もなく座っていただいている。それだけで、これはたいへんな力があります。すばらしい方々が参加して下さり、活動に働きかけてくださっています。

厚生労働省もこれだけたいへんな問題でありますので、ぜひエネルギーを出していただきたいとあえて申し上げておきます。これだけ運動が広がるのも、皆様方、そして全国各地の認知症に何とか取り組んでみんなが幸せになれるようにという熱い思いがあればこそです。そういう思いに乗って始めさせていただいたこの運動が、大きな時の流れにうまく合致して、大きなエネルギーを引き出すことができたという風に思っています。心から感謝いたしております。この運動は「認知症を知る1年」キャンペーンということでスタートして、これだけ広がってまいりました。さらに継続して10年先のすばらしい仕上がりに向かって参りたいと思います。

今日はそのためにも、どれだけの事をやれたのか、そしてどこが問題なのか、まずは第1部でその共通認識を持ちたいということでもあります。すばらしい報告が続くと思います。

みんなでがんばっていきましょう。ありがとうございました。

2. 挨拶

厚生労働省老健局長 磯部文雄

ただいまご紹介いただきました磯部でございます。
昨年の7月に堀田先生を始めとして100人会議の皆様方で会議を
発足していただいて、それぞれのお立場で認知症を知る1年という
キャンペーンにご協力をいただいております。

厚くお礼申し上げます。

わが国では要介護認定を受けておられる方々の半数近くの約1
70万人の方が認知症で、そして今後20年間でそれが倍増するの
ではないかと思われております。わが国の高齢者施策の上で、認知症への対応は最優先で取り組むべ
き課題であると考えております。本年4月から改正されました介護保険法が施行されますが、認知症の方
を支える意味で、高齢者の尊厳の保持を基本とした地域密着型サービスの創設、あるいは地域包括支援
センター、総合的なマネジメントの整備を進めていきたいと考えております。



また、国の制度的な対応以外にも、それぞれの場所で、例えば医療では早期の適切な診断をやっ
ていただかなければなりませんし、またご本人やご家族に対して認知症に関する知識と理解をしていただくよ
うに支援をしていくこと、介護サービスでは医療と連携をとってそのサービスの質の向上を図っていくと、こ
うしたことを総合的に進めて、認知症になっても安心して暮らせる町づくりを実現していくことが非常に重
要だろうと思っております。

この「認知症を知る1年」の運動につきましては、国民の皆様一人一人に認知症についての正しい知識
を持っていただき、認知症の方々が尊厳を持って暮らし続けることをささえる地域づくりというものをめざし
ておりますが、皆様のご尽力によりまして順調なスタートを切ったのではないかと考えております。

本日はこのあとにさまざまな地域やさまざまな分野での取り組みのご報告がありますが、われわれ厚生
労働省といたしましてもこの1年の成果を踏まえまして、さらにこうした運動を定着普及させていくとともに、
全国のすべての市町村が認知症になっても安心して暮らせる町になるよう今後も共に努力をしてまいり
ます。

最後になりましたが、この100人会議の事務局としてご活躍いただいております国際長寿センター、呆
け老人をかかえる家族の会、認知症介護研究・研修東京センターの皆様、また協力機関としてご活躍を
いただいております全国キャラバン・メイト連絡協議会に厚くお礼申し上げます。

お集まりの皆様がこの運動への引き続きのご協力をお願いいたしまして、挨拶とさせていただきます。

3. 年間活動報告

1) 報告1「認知症サポーター100万人キャラバン」全国キャラバン・メイト連絡協議会菅原弘子

◆認知症サポーター100万人キャラバンとは◆

認知症を理解し、認知症の人や家族を温かく見守り、支援する人（認知症サポーター）を1人でも増やし、認知症になっても安心して暮らせる町づくりを市民の手で展開していくものである。

認知症サポーターの育成にあたっては、まず認知症の正しい知識と具体的な対応方法などを市民に伝える講師役（キャラバン・メイトと呼ぶ）を養成する。

このキャラバン・メイト養成研修は昨年8月末札幌市を皮切りに、今年度末までには約40箇所に及ぶ研修会が実施される予定である。

キャラバン・メイトと認知症サポーター養成の実施状況(平成18年1月26日現在)

キャラバン・メイト養成実施状況

- I. メイト総数 **3,272 人**
- (1)キャラバン・メイト養成研修修了者数 1,664 人
- (2)全国農業組合中央会研修修了者数 1,608 人
- II. メイト養成研修実施状況
- (1)キャラバン・メイト養成
- 研修実施自治体数 16 (18回)
- 17年度内実施予定自治体数 22 (24回)
- (2)全国農業組合中央会キャラバン・メイト養成
- 研修実施組合数 22 (36回)
- 17年度内実施予定組合数 15 (20回)

認知症サポーター養成状況

- I. サポーター総数 21,913 人

実施主体	人数	サポーター活動場所	
(1)地域(自治体養成)サポーター	3,988 人	地域住民	1,920 人
		職域・企業団体	1,222 人
		学校関係	846 人
(2)全国農業組合中央会研修サポーター	4,532 人	JA 組合員	
(3)世界アルツハイマーデー記念講演会参加者等	13,463 人	不特定のため不明	

- II. サポーター講座実施状況

- (1)認知症サポーター養成講座
- 実施市町村数 23 自治体(86回)
- 17年度内実施予定市町村数 32 自治体(89回)
- (2)全国農業組合中央会サポーター養成講座
- 実施組合数 58 組合 (128回)
- 17年度内実施予定組合数 58 組合 (90回)
- (3)その他
- (社)呆け老人をかかえる家族の会
- 「世界アルツハイマーデー記念講演会」開催支部数 30 支部 (32回)
- その他シンポジウム、セミナー開催団体 3 団体 (5回)

2) 報告2「認知症の人『本人ネットワーク』支援」

呆け老人をかかえる家族の会副代表理事 勝田登志子

本人の思い・家族の願いをつなぐ社会に伝えるために
呆け老人をかかえる家族の会

1. 本人の思い

わたしの 病気について知ってもらいたいです。

わたしの ねがいを知ってもらいたいです。

まわりに ささえる人がいれば、普通にすごせることを 知ってもらいたいです

わたしとおなじ病気の人が、おだやかに くらすためのかんきょうをねがってます。

『本人の思いとは何か』より

2. 2004 年京都国際会議

越智さんの発言



3. 呆け老人をかかえる家族の会のこれまでの活動



4. 本人ネットワークの必要性

- ・本人の思いがあまりにも知られていない
 - ・本人の思い・家族の願いを大切にしたい支援が足りない
 - ・本人の思いを知ることが難しい
 - ・本人の思いを表せる機会・場・仲間をもつことが難しい
- ☆もっと本人が早期から安心して思いを表せる場・仲間や情報・知恵を得られるつながりが必要

5. 今年度「本人ネットワーク」支援の取り組み

1) 本人の場に関する情報収集

- ① 呆け老人をかかえる家族の会の「つどい」の場、ノウハウ
実態調査

②その他、本人の参加している活動

本人の声を聴いて活動しているデイサービス、
地域の家族会(若年期認知症の会)

2)ホームページ、報告書作成

3)本人の思い 本などのリストづくり

6. ホームページ、つどい、書籍などの紹介

<http://www.dai-jobu.net/>

7. 本人ネットワークを各地で育てていくためのポイント

* 家族支援、家族会活動と必ずセットで

家族の支援抜きには、「本人ネットワーク」は実現しない

* すでに始まっている先駆的取り組みからノウハウをしっかりと学ぼう、伝えていこう

場作り、支え手のあり方、内容、配慮点ほか

* 本人が集いやすい小さな場を各地で育てよう

* 必要な人が「本人ネットワーク」の存在を早く知ることができるように

* 地道に時間をかけて

来年以降もキャンペーンと連動して継続した取り組み

8. 本人の思いを知るための参考資料リスト

1)書籍

○家族の会が出版している書籍

- ・ ほけても安心して暮らせる社会をⅡ、呆け老人をかかえる家族の会の25年誌、2005
- ・ 痴呆の人の「思い」に関する調査、2004
- ・ 「痴呆の人の思い、家族の思い」 中央法規、2005
- ・ 「本人の思いとはなにか」 クリエイツかもがわ、2005

○家族の会の出版以外の書籍

- ・ 「私は誰になっていくの?・アルツハイマー病者からみた世界」 かもがわ出版、2003
- ・ 「私は私になっていく・痴呆とダンスを」 かもがわ出版、2004
- ・ 「アルツハイマーと闘う・言葉と記憶がすべり落ちる前に」 原書房、2003
- ・ 「痴呆を生きるということ」 岩波書店、2003
- ・ 「認知症とは何か」 岩波書店、2005
- ・ 「物語としての痴呆ケア」 三輪書店、2004



2)映像

○「認知症の人から学ぶ～クリスティーン・ブライデン講演より～」(第1巻～第3巻) シルバーチャンネル、2003

○「痴呆の人の体験世界を感じてみよう」 シルバーチャンネル、2002

3) 報告3「認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進」

認知症介護研究・研修東京センター主任研究主幹 永田久美子

～本人と家族の尊厳を保つために～

◇事業内容－今年度の取り組み(2006年1月末現在)

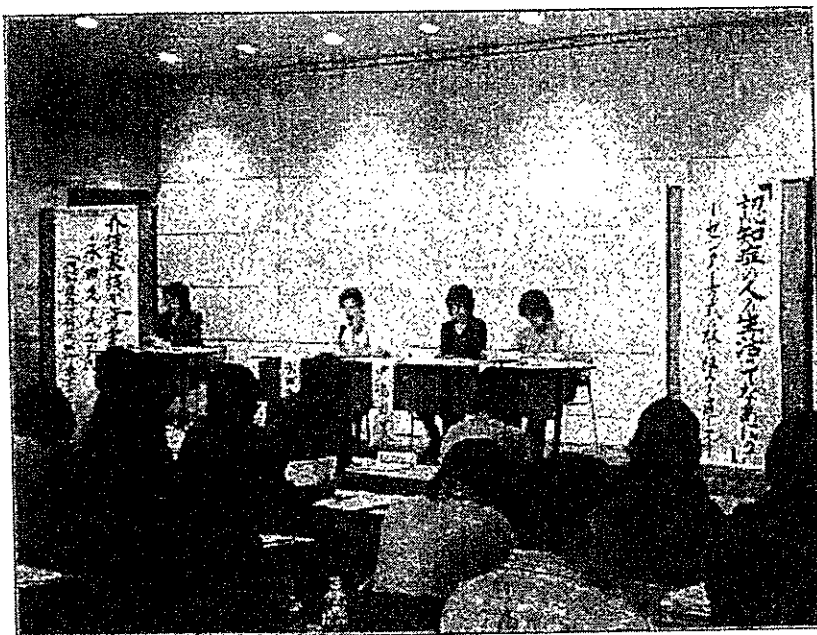
○「本人・家族」からプロ(ケアマネジャー)へ、思いや生活実態等を情報発信することの大切さ、それをスムーズに行うための共通道具としてシートの活かし方を広く伝える。

- ・介護家族や一般市民の認知症講座等で伝達
全国 10ヶ所 約1,500人対象
- ・医療・福祉関係者の研修で伝達
全国 130ヶ所 約16,000人対象

○「家族の声と力を活かしたケアプラン」の推進

- ☆講座開催 : 全国3ヶ所(愛知、千葉、東京)
- ☆中間報告会: 12月4日(愛知)
- ☆家族からの取り組み実例をもとに、「本人・家族の力を活かしたケア」のための実践ガイド(試行版)、家族による活用事例集、の作成

◇中間報告会



呆け老人をかかえる家族の会愛知県支部にて

2005年12月

◇今年度とりくんでみた家族の声

～家族の記入でケアが変わり始める、家族自身が変わる、提案が生まれる～

- 施設の方にどの程度までお願いしていいかわからなかったが、シートを通じて伝えたら気持ちよく配慮してもらえてプラスになった。
- 小さなことでもできる能力があることをそれぞれの関係者に知っていただき、小さい事を見つけながら自分でできることをやらせてほしい。
- 現場で汗水たらしている人に、今後、母が施設で快適に暮らせるようにしてほしいと伝えたい。
- シートの記入をきっかけに担当者会議を開いてもらうことができた。
- 具体的なことを伝えることができケアマネさんとのかかわりも強くなった。
- いろいろな場面で本人がいったことをまとめることで、こんな場面も、あんな場面もあることに気付ける。
- 自分が思っていた母の思いと違うことを聞いて、改めて母のことを見直す機会となった。
- 昔を振り返ることがなかったので、これを機会に振り返り、少し母にやさしくなれた。
- 書くことではなく、いかに活用するか、専門職でもケアマネさんの力量が大事なので頑張ってもらいたい。
- 書けないけどいいたいことはいっぱいある、そういう人は家族同士で書ける人が話しを聞いて書きながらシートをうめていくこともできるのではないかな。

◇今年度とりくんだ家族を支えてきたケアマネージャーさんの声

～家族からの発信でケアがレベルアップ、本人と家族を支えるチームが育つ～

- 利用者さんの背景を知っているつもりだったが、シートで書けるところが少なく、娘さんが書いたシートをいただき、何もわかっていなかったことに気づいた。
- ショートステイ利用時には情報提供書を渡すが、現場では利用者さんにどう関わっていいのかわからず失敗をしながら対応している現状なので、このシートがあれば失敗なく見ていけるのではないかなと思う。
- 認知症に関わらず、ケアマネは月1回しか会えないことが多いので、家族やデイサービスやヘルパーさんのほうが日々のことを良く知っているのだから、シートを通して日々の情報がダイレクトにケアマネに入ってくる状況をつくっていききたい。

◇今後に向けて

- 「家族からもっと発信する、上手く伝える方法」をより広める。
- そのための共通道具(センター方式シート)の
 - ・使い方・活かし方を広める。
 - ・上手く使っていくための支援策を広げる。
(講座、ガイド、サポーター)
- 認知症の本人自身がシートを使って、自らの思いや力を伝える実践を広げていく。

- ♥ 本人・家族の声や力を活かして、互いのケアをよりよく、より楽に
- ♥ 認知症になっても、本人と家族が自分らしく暮らしつづけていくために

4) 報告4「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2005」

認知症介護研究・研修大府センター長 柴山漢人

柴山でございます。「『認知症になってもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン 2005」につきましては、本日の第2部で詳しく発表されますので、わたくしからは簡単に経過を中心にして申し上げたいと思います。

このキャンペーンは、昨年度から始まり、「『痴呆の人とともに暮らす町づくり』地域活動推進キャンペーン」といっておりました。主旨はまったく変わっていないのですが、「認知症」への呼称変更に伴って名称を変えたということでもあります。

昨年度は2004年の秋に京都で行われた「国際アルツハイマー病協会第20回国際会議」で表彰式・発表会を行い本日と同じように大変多くの方が全国から参加されました。

このキャンペーンは、認知症の方を地域で支える先進的な活動を全国から募集し、選考の上でその活動を表彰して発表していただくというものです。これを進めていくことによって、認知症の人の本来の力を活かしながら暮らす町づくりの実践を全国に広げていきたいと考えています。

本年は「認知症を知る1年」の中に位置づけられ、「100人会議」の皆様にもさまざまな形でご協力いただいております。

本年度のキャンペーンは昨年4月から募集を開始し、10月末に締め切りました。昨年は応募エントリーの総数が60件でございまして、本年は77件のご応募をいただきました。この会場には応募していただいた方がたくさんいらっしゃっていると思います。改めてお礼を申し上げます。

さて、応募を締め切らせていただいてから、選考基準に基づき11月17日に第1次の選考、12月1日に最終選考を行いました。その結果、本日、後ほど第2部で受賞者のかたに登壇していただくわけですが、4つの地域活動に対して奨励賞、3つの地域活動に対して特別賞を用意いたしました。

入賞された方、それから残念ながら選外となった方も非常に熱心に活動を展開しておられて、わたくし自身、選考にあたりながら多くのことを学ばせていただいた次第です。いずれも、「地域で認知症の方を支える」活動を継続していく上でたいへんに参考となり、モデルケースとして貴重な活動でございますので、これから報告書やホームページなどで活動内容をご紹介してまいりたいと思っております。

それでは皆さん、ぜひ第2部の発表をお聞きください。

以上で簡単ではございますが、「『認知症になってもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン 2005」の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

5) (資料) 啓発活動の拡大および広報活動

■新規入会会員

82団体・個人(平成17年7月8日:第1回100人会議)

→96団体・個人(平成18年2月1日現在)へ

■世界アルツハイマーデー(9月21日)記念イベントの開催(呆け老人をかかえる家族の会主催)

1) 記念講演会

全国各地で開催され、出席者(9, 166人)は全員、認知症サポーターとして認定されました。

2) 街頭一斉活動

9月21日の世界アルツハイマーデー前後に、家族の会では全国一斉に街頭での認知症啓発活動を実施しました。滋賀県では国松県知事が、福岡県では認知症本人の越智さんがご夫婦で参加された他、100人会議も東京や富山で参加し、キャンペーンの啓発リーフレットを配布しました。

■広報活動—マスコミ掲載記事、番組

◇新聞・雑誌掲載

平成17年

- 4月 15日 日本経済新聞 ～100人会議設立発起人会について
- 6月 19日 朝日新聞 ～呆け老人をかかえる家族の会—認知症本人の声 聞こう生かそう
- 7月 8日 (前後日程にて)各専門誌にて ～第1回100人会議開催について
- 8月 25日 読売新聞 ～理解深めて支え合おう—認知症
- 9月 月刊介護保険 2005年9月号 ～介護保険担当者会議—キャラバン・メイト養成について
- 9月 23日 毎日新聞 ～100人会議、認知症を知る1年、認知症サポーターについて
- 10月 3日 朝日新聞 ～オレンジリング(認知症サポーター)について
- 10月 6日 女性セブン10月20日号 ～チャリティーバンド—オレンジ:認知症サポーター
- 12月 9日 (前後日程にて)各専門誌にて ～町づくりキャンペーン表彰団体決定 等

◇テレビ・ラジオ放映など

平成17年

- 7月 9日 NHK:おはよう日本(ニュース報道)
- 9月 24日 NHK:ETVワイド・ともに生きる(生放送/スタジオトークライブショー)
- 10月 11日 J-Wave:JAM THE WORLD ～カラーバンド特集
- 12月 9日 ニッポン放送:武田鉄矢・今朝の三枚おろしネットほか:政府広報CM
(～平成18年2月28日随時)

平成18年

- 1月 14日(～1月27日) 映画館(全国10館)にて政府広報CM 等。

※掲載一覧は、ホームページ <http://www.ninchisho100.net> にてご覧いただけます。

Ⅱ. 第2部 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005 表彰式・地域活動報告会

1. 挨拶

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005選考委員長 堀田 力

選考委員長として総括的な報告をさせていただきます。

本当に素晴らしい発表がこれから行われます。どれ1つとして同じものはありません。各地域で活動されている方々の熱い思いと知恵があふれております。町づくりキャンペーンは地域で認知症の方を支えていくというキャンペーンでありますけれども、そのやりかたは決まっているわけではありません。それぞれの地域で知恵を集めてやっていくしかないのです。みなさんが知恵をしぼられて活動されているこのような知恵がたくさん集まっていくことによって、いろんな選択肢ができて活動が広がっていくのだと思います。活動の内容は地域それぞれでバリエーションを作っていくっていただきたいと思います。

選考はたいへんでしたが、選考委員の先生方は深い議論を重ねてくださいました。

賞に選ばれなかった活動の中にも、素晴らしい活動がたくさんありました。できれば全部の活動を紹介したい、そういう思いをもっております。1つだけ申し上げますと、昨年の町づくりキャンペーンで三重県桑名市のウエルネスグループの多胡さんは今年も応募してくださいまして、認知症の人たちでグループを作って地域の防犯活動をしているという、認知症の人の能力を生かす素晴らしい活動を紹介してくださいました。このようにすばらしい応募活動はたくさんありました。

今日は、奨励賞を受賞された活動の成果を報告していただいて、みんなでその内容を吸収したいと思います。



厚生労働副大臣 赤松正雄

厚生労働副大臣の赤松雅夫と申します。

認知症は誰でも起こりうる病気でありまして、これから 20 年間に倍増すると見込まれております。けれども、認知症になっても周囲の理解と地域の支えがあれば、認知症になっても自分らしい生活をおくることは十分可能です。このことから、厚生労働省では本年を「認知症を知る 1 年」という位置づけにいたしまして、国民の皆さまに認知症についての正しい知識と理解を持っていただくとともに、認知症の方が尊厳をもって暮らしつづけることを支える地域作りをすすめております。

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンは、このような取り組みの柱の1つでありまして、本日受賞された皆様方は認知症でもだいじょうぶな町づくりに先駆的に取り組んでおられる皆さまです。

皆様方の日頃のご努力に対しまして心から感謝申し上げますとともに、先駆的な取り組みが全国に発信されて広がっていくことを強く期待しております。厚生労働省としましては引き続き認知症対策を総合的にしっかりと進めてまいります。

皆様方のご協力をお願いいたしまして、私からのご挨拶といたします。



2. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005の概要

◆目的

認知症の人を地域で支える先進的活動の事例を広く全国から募集して選考の上、顕彰・発表します。それによって、認知症の人の本来の力を活かしてともに暮らす新しい町づくりの活動を全国ではぐくむことを目的とします。

◆主催等

- ・主催 : 認知症介護研究・研修東京センター
認知症介護研究・研修大府センター
認知症介護研究・研修仙台センター
- ・共催 : 住友生命保険相互会社
社団法人 呆け老人をかかえる家族の会

◆実行委員会

- 委員長 長谷川和夫 (認知症介護研究・研修東京センター長)
- 委員 加藤 伸司 (認知症介護研究・研修仙台センター研究・研修部長)
古河 久人 (住友生命保険相互会社調査広報部長)
小長谷陽子 (認知症介護研究・研修大府センター研究部長)
杉山 孝博 (社団法人呆け老人をかかえる家族の会副代表理事)
永田久美子 (認知症介護研究・研修東京センター主任研究主幹)

◆選考経過

◇選考基準

①新しい認知症ケアと町づくりの実践状況

認知症の人と共に暮らす町を作るための活動が展開されている。関係者が協働して取り組んでいて、今後将来的に発展が期待される。

②本人が町でいきいきと暮らす姿の実現

認知症の人が地域でいきいきと暮らしている姿の実現が示されている。

③理解を広げる取り組み

認知症の人と支援について理解を町に広げるユニークな取り組みがなされている。

④他の地域でも展開できる可能性

他の地域でも展開可能な内容や方法である。

◇第1次選考

11月17日の第1次選考は、認知症介護研究東京センター永田久美子主任研究主幹、同大府センター小長谷陽子研究部長、同仙台センター加藤伸司研究・研修部長が担当しました。選考基準にもとづいて各奨励賞ごとに3点、計12点の地域活動が第1次選考を通過しました。

◇最終選考

12月1日の選考委員会では、以下の4つの各奨励賞検討チームで最終選考が行われました。(堀田力選考委員長、末次彬副委員長は全体を総括)

- ① 厚生労働大臣奨励賞〈町ぐるみ、地域活動、ネットワーク部門〉
（北良治（部門主査）、梨元勝、長谷川和夫）
- ② 認知症介護研究・研修センター奨励賞
〈本人の力の発揮、多様な個別生活支援、セラピー部門〉
（小宮英美（部門主査）、板山賢治、本間昭、横山進一）
- ③ 呆け老人をかかえる家族の会奨励賞〈介護家族支援、家族の力の発揮部門〉
（長嶋紀一（部門主査）、高見国生、森岡茂夫）
- ④ 住友生命保険相互会社奨励賞〈権利擁護、新しい住まい方、世代間交流、共生部門〉
（中島紀恵子（部門主査）、柴山漠人、高村浩、中山二基子）

その後、選考委員会全体会の場でそれぞれの奨励賞部門の選考結果および選考理由が、各部門主査から説明され、討議が行われた後、選考委員長の司会のもとで全員での確認が行われました。特別賞の選考では、選考委員からの推薦候補が出され、同じく全体討議の上、確認されました。

◇選考委員一覧

委員長	堀田 力	（財）さわやか福祉財団理事長・弁護士
副委員長	末次 彬	（社福）全国社会福祉協議会副会長
委員	板山 賢治	（社福）浴風会理事長
	北 良治	北海道 奈井江町長
	小宮 英美	日本放送協会解説委員
	柴山 漠人	認知症介護研究・研修大府センター長
	高見 国生	（社）呆け老人をかかえる家族の会代表理事
	高村 浩	弁護士
	長嶋 紀一	認知症介護研究・研修仙台センター長
	中島紀恵子	新潟県立看護大学学長
	中山二基子	弁護士
	梨元 勝	芸能レポーター・函館大学教授
	長谷川和夫	認知症介護研究・研修東京センター長
	本間 昭	東京都老人総合研究所精神医学部長
	森岡 茂夫	国際長寿センター理事長
	横山 進一	住友生命保険相互会社取締役社長（敬称略・50音順）

3. 全国から寄せられた地域活動一覧(受付順)

応募者名称	
1	グループホーム レインボー2
2	小規模多機能福祉施設 イーケア三田
3	協栄興産株式会社 ふれあいの家 長住
4	有限会社 託老所あんき
5	グループホームささゆり
6	医療法人藤本クリニックデイサービスセンター
7	砺波地域リハビリテーション支援センター 南砺市民病院
8	介護者の集い「オアシス」
9	社会福祉法人ふるさと自然村
10	㈱札幌ケアシステム
11	フィーリングアーツボランティア委員会
12	特定非営利活動法人 在宅生活支援サービスホーム 花組
13	・待賢住民福祉連合協議会 ・小川在宅介護支援センター ・京都市上京区社会福祉協議会 ・上京福祉事務所
14	北海道本別町
15	社会福祉法人 恵仁会 特別養護老人ホーム 鹿屋長寿園
16	近江八幡市健康福祉部健康福祉課
17	小規模多機能施設 井原ラーゴム
18	全国マイケアプラン・ネットワーク
19	(株)スルガケアサービス AMBIK おやま
20	認知症高齢者を支える家族の会「きさらぎ会」
21	医療法人エスポアール出雲クリニック 重度認知症老人デイケア 小山のおうち
22	株式会社メッセージ 介護付有料老人ホーム「アミーユ」
23	社会福祉法人 自立共生会
24	特定非営利活動法人 ときわ会 藍ちゃんの家 第二藍ちゃんの家
25	沼田市・沼田市社会福祉協議会・在宅介護支援センター協議会
26	東京都北区戦略的介護予防推進チーム(認知症グループ)
27	(財)シニアルネサンス財団
28	阿倍野介護家族の会・えがおの会
29	グループホーム六甲・わーらいふ 澁
30	宮城県田尻町(スキップセンター)
31	在宅介護支援センター うらら
32	社会福祉法人 櫻灯会 特別養護老人ホーム日の出紫苑
33	神鋼ケアライフ 岡本ステーション
34	デイケアハウスにぎやか
35	東京都町田市グループホーム連絡会
36	石川県立看護大学附属地域ケア総合センター研究事業認知症予防グループ
37	横須賀市 健康福祉部 長寿社会課
38	社会福祉法人 白石陽光園
39	特定非営利活動法人 楽
40	池田 ちか子
41	平林クリニック
42	WACあいネットワーク NPO法人福祉振興会
43	山手医院
44	社会福祉法人浴風会 グループホームひまわり
45	社会福祉法人浴風会 南陽園
46	全国石油商業組合連合会
47	特別養護老人ホーム返里苑
48	中林 重祐
49	田村 雄次
50	広島県老人呆けの人を支える家族の会
51	特定非営利活動法人純正律音楽研究会
52	阿部 政男
53	社会福祉法人マグノリアセン 特別養護老人ホームシエステさとの花
54	NPO 法人パオッコ
55	社会福祉法人 東京有隣会 第2有隣ホーム
56	岩手県盛岡市医師会
57	(有)ケアサポートあい デイホーム「ちゃのみ」
58	(社福)ふるさと会 中追の里
59	認知症本人・小菅マサ子&介護家族・小菅もと子&地域の人たち
60	社会福祉法人 悠和会 認知症高齢者グループホーム「銀河の里」
61	よこはま回想法ライブレビュー研究会
62	有限会社 有明の里
63	鳥取県琴浦町役場
64	医療法人社団 聖仁会
65	スリーA予防デイサービス 折り梅
66	行田市役所 高齢者福祉課
67	特定非営利活動法人 アビリティクラブたすけあい
68	池田町在宅介護支援センター
69	東京都町田市グループホーム連絡会
70	社会福祉法人 正吉福祉会 府中市立 よつや苑
71	NPO 法人ワーカーズコープ
72	ボランティア劇団「気仙ポケ一座」
73	長崎市在宅介護支援センターにしきの里
74	NPO 法人 校舎のない学校
75	写真で見る昭和30年代の地域を研究する会
76	国立音楽院
77	東映(株)映画宣伝部

4. 奨励賞、特別賞表彰式

①厚生労働大臣奨励賞

表彰:赤松正雄(厚生労働副大臣)

受賞:『小山のおうち』の実践 10 年と『交流塾』の展開

医療法人エスポール

出雲クリニック重度認知症老人デイケア

小山のおうち

(島根県出雲市)

施設長 高橋幸男



②認知症介護研究・研修センター奨励賞

表彰:長谷川和夫(認知症介護研究・研修東京センター長)

受賞:「若年・軽度認知症専用自立型デイサービス

『もの忘れカフェ』からみえてきたもの」

医療法人藤本クリニック

デイサービスセンター(滋賀県守山市)

デイサービスセンター所長 奥村典子



③呆け老人をかかえる家族の会奨励賞

表彰:高見国生(呆け老人をかかえる家族の会代表理事)

受賞:「介護家族の交流・研修と認知症の理解を地域に広めるための発信」

阿倍野介護家族の会・えがおの会

(大阪府大阪市阿倍野区)

代表 横尾禮子



④住友生命保険相互会社奨励賞

表彰:横山進一(住友生命保険相互会社取締役社長)

受賞:「共生型グループホームながさかの実践～年齢や障害を越えて、誰もが地域で暮らし続けるために～」

社会福祉法人白石陽光園(宮城県白石市)

八島浩



奨励賞の活動報告は p.19 以下で紹介しています

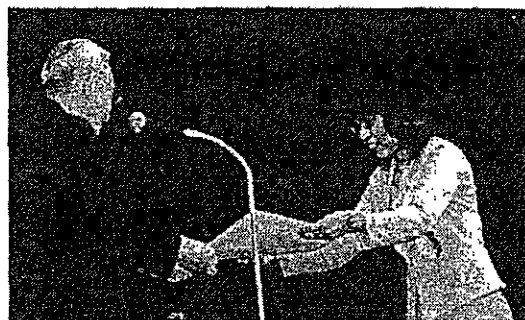
⑤特別賞表彰

表彰:長谷川和夫(「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン 2005」実行委員長)

受賞:「SPSD(認知症模擬演技者)による支援プログラムづくり」
特定非営利活動法人アビリティクラブたすけあい(東京都世田谷区)
香丸真理子



受賞:「発信『忘れてもしあわせ』の思い」
認知症本人・小菅マサ子&介護家族・小菅もと子&地域の人たち(愛知県豊明市)
小菅もと子



受賞:「認知症こそマイケアプラン『あたまの整理箱』『マイライフプランの玉手箱』の作成」
全国マイケアプラン・ネットワーク(東京都府中市)
島村八重子



特別賞の活動報告は p.28 以下で紹介しています

5. 奨励賞活動報告

1) 厚生労働大臣奨励賞

『小山のおうち』の実践 10 年と『交流塾』の展開

医療法人エスポータル出雲クリニック 重度認知症老人デイケア 小山のおうち(島根県出雲市)

施設長 高橋幸男

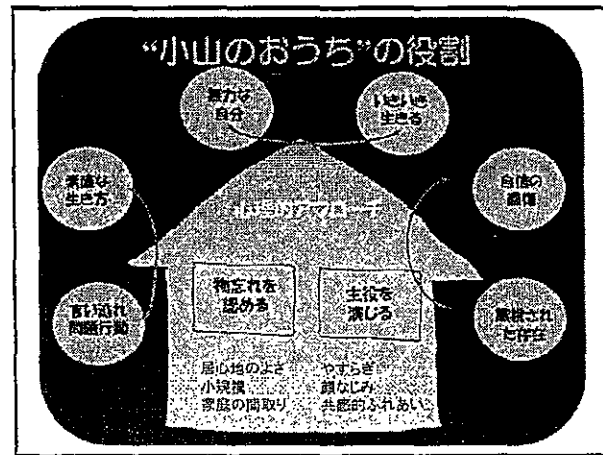
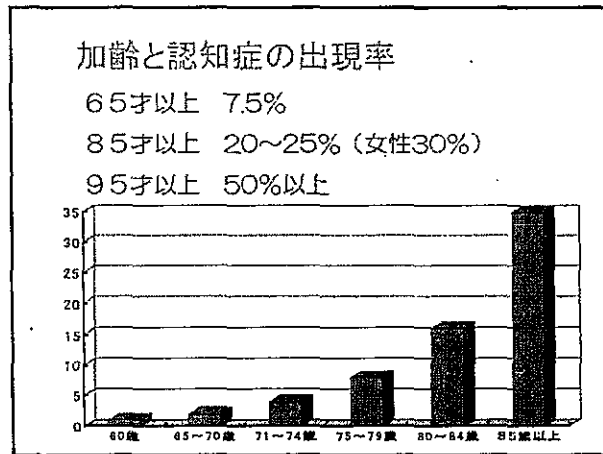
[入賞理由]

認知症の人自身の思いを大切にされた関係者の長年にわたる継続的な取り組みが大きな成果をあげている。保健・医療・福祉の分野や官民を超えた地域の幅広い活動が展開されており、認知症の人と家族を町ぐるみで支えていく貴重な取り組みの実践モデルである。学校にも出かけ、子どもたちにも働きかけようとしている点も世代を超えた認知症の理解と支援を広げていく上で将来的な可能性が大きい。

『小山のおうち』の実践 10 年と
『交流塾』の展開

医療法人エスポータル出雲クリニック 小山のおうち
高橋 幸男

長らくこの事業を続けてこられたことに敬意を表します。認知症の人々の生活を支えるために、地域全体で取り組まれている活動は、とても素晴らしいと思います。これからも、ぜひ、ご尽力をお願いします。



2) 認知症介護研究・研修センター奨励賞

「若年・軽度認知症専用自立型デイサービス『もの忘れカフェ』からみえてきたもの」
 医療法人藤本クリニック デイサービスセンター(滋賀県守山市)
 デイサービスセンター所長 奥村典子

[入賞理由]

認知症のご本人が病気と向き合い、受け容れながら、認知症になりながらも自分の人生をあきらめずに生きていくことを支援するというあり方は、今後の認知症ケアのあり方の基本として高く評価できる。特に、ケア者側が用意したプログラムにあわせるのではなく、認知症になっても自分たちのやることは自分たちで決め、仲間とともに自分たちの過ごす時間の在り方を豊かに作り出していくことは、無気力にならずに自主性や各自の暮らし方を保ちながら生きていく上で最も必要な支援であると考えられる。デイケアという施設内だけにとどまるのではなく、町に出かけ、町の人たちの理解や関わりを生み出していく活動のあり方は、今後の重要なモデルである。

**若年・軽度認知症専用自立型デイサービス
「もの忘れカフェ」からみえてきたもの**


医療法人 藤本クリニックデイサービスセンター(滋賀県)

奥村典子・佐治千恵子・高橋祐二・奥田靖子・伏木久代・野口洋子・村上勝俊
 上田様・遠藤恭子・江崎洋子・桑島幸代・田中徹・川島千枝・竹内みゆき・藤本直規

写真の提示についてはすべてご了解いただいています

藤本クリニックデイサービスセンター概要

《開院当時のデイサービス》
 スタッフが用意したプログラム
 緊張した表情、できる・できないが目立つ

《参加者の方が奮発しています。(ユニット1)》


↓

《開院当時のデイサービス》
 定期的なプログラムをなくす取り組みスタート
 参加者のその日の様子を見て、することを決める
 (平成12年5月～)


↓

《開院当時のデイサービス》
 いやなことはしなくていい
 よく笑い、それぞれが自分らしく過ごし始めた

《開院当時のデイサービス》
 自分たちのやりたいことをやります。
 府省大会の真剣議員です。(ユニット2)

《開院当時のデイサービス》
 取り組み後の特徴
 集団の規模、雰囲気など異なる2ユニット
 固定的なプログラムがなく、個別性重視

《開院当時のデイサービス》
 要支援～要介護5 若年者～高齢者まで
 登録者数は100名前後(月平均)

《開院当時のデイサービス》


**「もの忘れカフェ」を始めるきっかけとなった
 ひとりの参加者の声**

「病気だと思えます。試練ですね」

「本当の気持ちを話せる場所がない。同じ悩みを持っている人はいますか？」

「仕事が進めならボランティアをやりたい」

「役割が欲しい。人の役に立ちたい」

「家族に申し訳ない。迷惑ばかりかけられない。何かをしたい」

「もの忘れカフェ」の約束事

《活動内容の決め方》


- ・ 活動内容は当日参加者の皆さんが話し合って決める
- ・ 活動内容が決まれば、活動達成のために必要な役割や準備、時間配分や手順などを決める
- ・ 参加者同士で協力していくつかのことに同時に取り組む

《活動内容の記録の仕方》

- ・ 必ず書いて残す一ホワイトボードと横断紙の両方を使い分ける
- ・ 1日の活動を個人ノートにも記入する
- ・ 写真、ビデオなどを多く残す
- ・ 買い物がある時は金銭管理はしてもらい、簡単な出納簿をつける

《スタッフの関わり方》

- ・ 手がかりときっかけ作りを徹する
- ・ どんなことでも、極力参加者に任せる
- ・ 関わり方の引き際を見極め、境界線はスタッフが引く
- ・ 自主的な活動を邪魔しない

《開院当時のデイサービス》


書くこと・買い物と出納簿

横断紙に書いたことを自分のノートに写します

《開院当時のデイサービス》


《開院当時のデイサービス》



《開院当時のデイサービス》



《開院当時のデイサービス》


参加者が決めた具体的な活動内容

- ・ 制作活動
 手芸・木工活動・調理活動など
- ・ 知的活動
- ・ 身体活動
 運動・外出・畑作業など

活動項目数100種類以上

《開院当時のデイサービス》


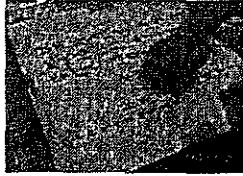
《開院当時のデイサービス》


参加者が決めた具体的な活動内容

【社会参加】

- ・新潟中越地震への義援金集めバザー
- ・清掃活動 駅周辺
- ・空き缶拾い
- ・講演会へ出席
自分たちの病気について確かめ
- ・古切手回収
- ・市内作品展出品
- ・市の観光案内所での問い合わせ
- ・外出先等の情報収集のための照会
- ・取材・見学者の受け入れ、対応
- ・挨拶文とお礼状の準備から発送まで
- ・年末大掃除・迎春準備(クリニック全体)
- ・部屋の模様替え
- ・1,2ユニットとの交流など他

「誰かのお役に立ち、自分たちにはできることは何なのか？と話し合いました。
・クリニック全体で古切手の回収にも取り組んでいます。」



参加者が決めた具体的な活動内容

【テーマ 病気について】

- ・アルツハイマーについて
- ・治療方法はあるのか
- ・病気を知りたい
- ・もの忘れをなくすための工夫
- ・日頃から気をつけることは何か
- ・病気をもう、あきらめたか？

【テーマ カフェに求めること】

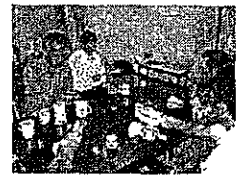
- ・自分たちがここに来ている意味
- ・何を求めてここに来ているのか
- ・スタッフに求めること

【テーマ 振り返りとこれからのこと】

- ・一年間を振り返って
- ・新年を迎えて
- ・新年度からやりたいこと
- ・これから先のこと
- ・これからやりたいこと
- ・これだけは言いたいこと 他

前向きに自分たちの病気について話します。

「病気になったことはあきらめるけれど、病気になつてからのことはあきらめない」



エピソード 畑

畑の下見



うね作り



植え付け



畑での昼食



エピソード 小旅行

駅での様子



昼食

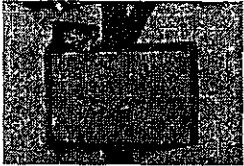


観光風景



エピソード 新潟県中越地震義援金バザー

バザーのポスター

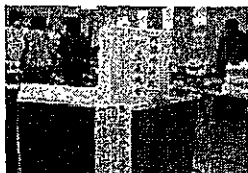


バザーの当日は家族交流会。物品の提供から、準備まで、ご家族も一緒に取り組んで下さいました。義援金は、75,142円でした。

バザーの様子



義援金箱



エピソード 清掃活動

カフェからの呼びかけで他のユニットからも参加します。



最後はゴミの分別まで責任を持って行います。



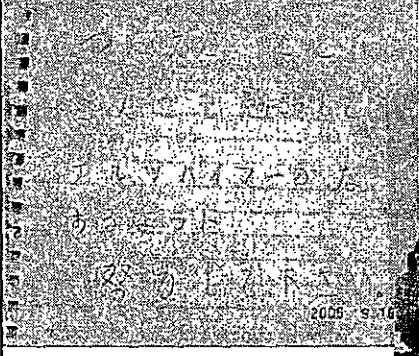

エピソード ユニット間交流

腕を組んで琵琶湖就航の歌をうたいます。
手を組み、肩を組み仲間だと実感します。




年齢も病気の程度も関係ありません。一緒にうたいます。病気でつながる仲間なのです。

伝えたいこと

もの忘れカフェの2年目の活動

書くことは絶対忘れません



換紙紙の整理



買物履歴 出納簿もつけています



古切手の整理



もの忘れカフェの2年目の活動

定期的に取り込む清掃活動。他のユニットからも大勢参加します




誰かの役に立ちたい。そうきんと折り鶴を老人ホームへ届けに行きました




伝えたいこと 仲間と共に

秋の小旅行 大原三千院




クリスマスプレゼントを配りました



ここに仲間はいる そのことだけは確かや
仲間にごそ助まされる
一人じゃないと言ってくれるから

3) 呆け老人をかかえる家族の会奨励賞

「介護家族の交流・研修と認知症の理解を地域に広めるための発信」

阿倍野介護家族の会・えがおの会(大阪府大阪市阿倍野区)

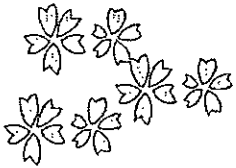
代表 横尾 禮子

【入賞理由】

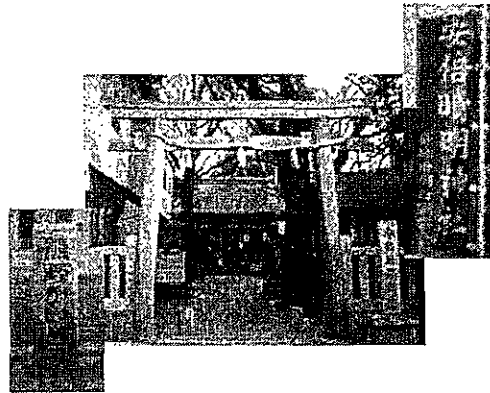
多様な人々が集まり介護家族を支える生き生きとした活動が展開されている。演劇を通じた啓発活動、会報を通じた相互情報交換、認知症予防に向けた取り組みなど、活動が多彩であるだけでなくひとつひとつの活動内容がユニークなアイデアであふれている。継続的な地道な活動が地域の多くの家族の支えとなっており、それらをまとめあげ、発展させ続けている取り組みは重要である。

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005

阿倍野介護家族の会 「えがおの会」



代表 横尾 禮子



昭和63年発足



月1回の交流会

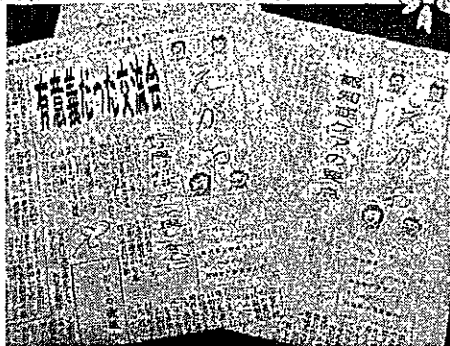


交流会の重要性



- 守秘義務を堅く守るので安心して要介護者の状態や困惑を話せる。
- 話すことで気分が落ち着く。
- すでに経験した会員が適切な助言をする場合がある。
- 自分は大変→もっと大変な人がいる
- 心のよりどころとなる仲間

会報「えがお」年10回発行



会報を通じて



- ◇介護日誌への投稿
- ◇誰でも、いつでも投稿できる
- ◇多くの人に書いてもらえるように
- ◇無記名
- ◇俳句投稿 記名
- ◇カットの募集 要介護者からの投稿も
- ◇投稿が癒しとなる
- ◇特養、デイサービスなどにも配布

介護劇
認知症はどんな病気？

荷造り名人
拾井好さん

俳句名人
里家えりさん

地域のグループと
協働で介護劇を

お医者さん役も
地域の人

あべの愛♡博覧会に参加

家族会に入ると

活動紹介

介護する人される人
ふたつを色んな言葉
訳してつなぐリストの贈り

阿倍野介護家族の会
「えがおの会」

えがおの会



- どこまで続くか、長い道のり。
旅は道づれ、共に歩こう。
- 自分は今苦しい。
でも、それにもかかわらず、
相手に対する思いやりとして
「えがお」を見せる。



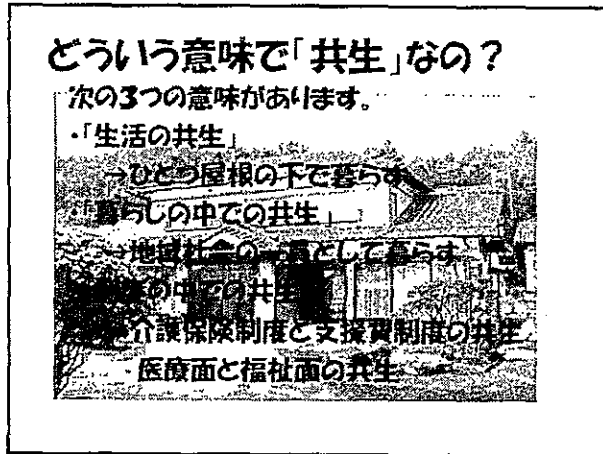
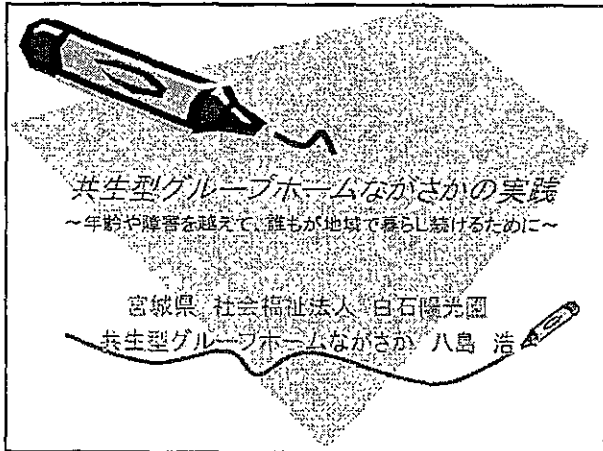
4)住友生命保険相互会社奨励賞

「共生型グループホームながさかの実践～年齢や障害を越えて、誰もが地域で暮らし続けるために～」
 社会福祉法人白石陽光園(宮城県白石市)

八島浩

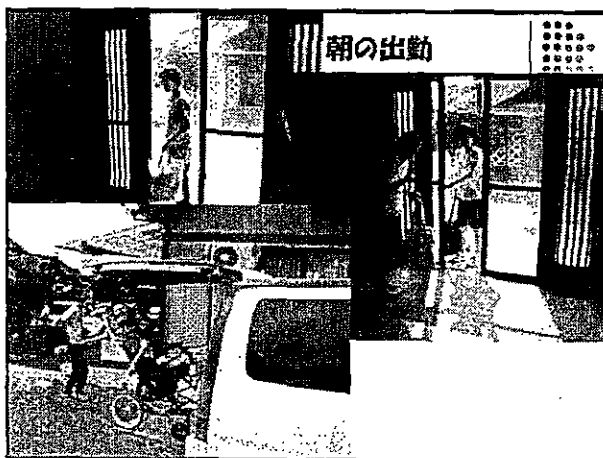
[入賞理由]

官民一体となって認知症の人と障害をもつ人々が共に暮らす支援を地域ぐるみで展開し、多くの成果を生んでいる。その活動の根底にはノーマリゼーションの理念がしっかりとあり、今後各地で重要となる共生の町づくりの普及進展に貢献するモデルである。



現在の利用者さん

利用者番号	性別	年齢	備 考
A	女性	37	重症心身障害 通所更生施設
B	女性	44	重度知的障害 施設作業手伝い
C	女性	56	中度知的障害 施設作業手伝い
D	女性	64	重度知的障害 職場実習
E	男性	73	要介護度1 脳血管性痴呆
F	女性	71	要介護度1 混合性痴呆
G	女性	77	要介護度1 脳血管性痴呆
H	女性	85	要介護度2 老人性痴呆
I	女性	80	要介護度3 脳血管性痴呆
J	女性	89	要介護度3→4 アルツハイマー型痴呆
K	男性	78	要介護度4→3 アルツハイマー型痴呆
M	女性	68	要介護度5→4 アルツハイマー型痴呆







生活から見てきたこと

・世代間の交流がある

お年寄りのみなさんは、朝、障害のある方を送り出し、夕方、迎えるという家庭内での「父母」や「祖父母」の「役割」を得ています。

この役割が、「張り合い」になり、認知症に対しても良い効果をもたらしているものと考えます。



まとめ

共生型グループホームの暮らしは決して「特別なこと」ではありません。むしろ、このように家庭的な雰囲気の中で、地域生活を続けていくことこそが、「あたりまえの生活」なのではないかと思っています。



6. 特別賞活動紹介

活動名：「SPSD（認知症模擬演技者）による支援プログラムづくり」

団体名：特定非営利活動法人 アビリティクラブたすけあい（東京都世田谷区）

担当者：香丸真理子

〔入賞理由〕

介護の最前線を担っているケア者たちが、仲間同士であるべき介護について常に模索していく姿勢は貴重である。本人が何を感じ、どうして不安になるのか、どうして混乱しているのかを当事者の立場になって考えることはケアの基本である。それを現場で実践する技を磨くために認知症の人のロールプレイの方法を工夫しながら、関係者や地域に広めていく地道な取り組みは今後の認知症の人の理解に立ったケアを市民に実践的にひろめていくことに貢献するものである。

〔活動の概要〕

NPO法人アビリティクラブたすけあい(以下ACT)は、1992年に東京を都市のモデルとして、「地縁や血縁」にとらわれず「誰もが安心して暮らし続けられるまちづくり」を目的に、ACT会員7400人が自主・自立のたすけあいの地域社会をつくることをめざして活動してきました。現在ACT会員有志により構成する東京の各自治体で実践する34団体のたすけあいワーカーズと連携ネットワークして、赤ちゃんから高齢者まで『地域で生きること、生活すること』を支援する「自立援助サービス」を中核にしてたすけあい事業をしています。そのほか介護保険事業・支援費事業・子育て支援事業にも参画しています。

在宅で暮らす認知症の人そして家族との出会いが、自立援助や訪問介護サービスを通して10年前よりはるかに多くなっています(全利用者数1,388人に対して認知症と思われる利用者数は200人)。在宅介護にかかわるケア者(ヘルパー)が認知症の人への対人援助技術を学ぶための研修として2001年度より認知症の模擬演技者(Simulated Person with Senile Dementia以下SPSD)により、ロールプレイを取り入れた研修を実施しています。

2003年には、認知症の人のケア実践事例「だいじょうぶ・だいじょうぶ たすけたすけられる痴呆の人のケア」を出版しました。今までの認知症の人の理解は、周辺症状だけを見て「本人は何も分からない、困った人、在宅では見きれない人、危険だから外に出さない」という問題対処型の関わりが一般的でした。実践事例から、認知症になっても認知症の人を中心にした家族やケア者(ヘルパー)の関わり方と地域の人の理解で、在宅で暮らし続けることができることがわかりました。課題として見えてきたことは以下の3点です。

- ①専門職としてケア者(ヘルパー)の認知症の対人援助技術の向上
- ②認知症の人をかかえる家族を支援すること
- ③認知症の人を支える地域づくり(ACT安心ネットワーク)

2001年から現在まで、①については、毎月のSPSD研修会を実施し、年に数回、ACTの内部スキルアップ研修、企業や学校・社会福祉協議会から演習依頼があり実施しています。②については、2005年度から家族向けのプログラムを作成し、実施し始めています。③については、②でミニ公開講座に来てくださった人を中心に「認知症の家族の会」をつくり、どのような支援があれば在宅で暮らし続けられるか、また自分が認知症になったらこうして欲しいというメッセージを残せるような活動を組立たいと考えています。

活動名：「発信！「忘れても、しあわせ」の思い」

団体名：認知症本人・小菅マサ子&介護家族・小菅もと子&地域の人たち（愛知県豊明市）

担当者：小菅もと子

〔入賞理由〕

応募の中心人物は認知症の方本人であり、「折り梅」という映画の主人公になったご本人である。認知症になったら何もできないというこれまでのイメージを払拭した功績は大きい。本人が自らの力を発揮しながら暮らすことを家族の立場から長年支え続けており、その過程で生まれている家族の新たな力や絆の深まりの可能性を、今後の家族や地域の人々へ示した意味は大きい。

〔活動の概要〕

「認知症になったら、死んだほうがまし」とまだ思われている世の中です。私たちは認知症の本人の思い、家族の思いなどすべてをオープンにし、地域と全国に10年間認知症を発信し続けています。認知症でも残っている能力はあり、周りの理解と協力があれば生き生きと過ごせることをお伝えしています。「分からんようになった。こんな私はダメな人間。早く死にたい」と苦しむマサ子は絵画を通じて自信を取り戻し、作品展を開催しました。目的は認知症をオープンにし、知ってもらうことです。楽しく・のんびり・交流する、をコンセプトに「忘れても、しあわせ」展と題し、認知症を発信しました。

介護を通じて知り合った地域の人たちの協力のもと、受付は地域の大学に通う女子大生、手作りのクッキーや饅頭を作ってくれたのはヤングママやおばさんたち主婦、お客様のおもてなしをしてくれたのは知的障害を持つ子どもたち。絵画のほかにも、俳句・粘土造形・折り紙・手芸なども飾りました。展示は作品ばかりでなく、小菅家の介護の工夫をコメントつき写真で紹介するコーナーや、福祉関係のチラシ・パンフレット・書籍などを置いた福祉情報コーナーも設けました。認知症よろず相談コーナーも設けました。

マサ子がお客様と交流しキラキラと輝いたことは何よりも大きな収穫でした。マサ子の役割はとても大きく、存在そのものが認知症の発信になっています。

同居からこの初個展までを、もと子は「忘れても、しあわせ」（日本評論社）という本にしました。本人の苦しみ、家族の思い、地域との関わりなどを書きました。「忘れても、しあわせ」が原作となり、認知症の家族をテーマにした映画「折り梅」（松井久子監督）ができました。原作の地、豊明市では、地域の人たちが映画制作に参加し、全国に文化・芸術・福祉を発信したのです。この映画は全国で1,200箇所地域で上映され、100万人がご覧になっています。「忘れても、しあわせ」の思いは、作品展・本・講演・映画と形を変えつつ、全国に広がっています。

私たちばかりでなく、認知症の本人と介護者は大きな大きな力を秘めています。認知症の真実の姿を伝え、啓蒙できる力を持っているのです。いついつまでも、「忘れても、しあわせ」の思いを発信し続け、「認知症でもだいじょうぶ」な町にしたいと思います。

活動名：「認知症こそマイケアプラン『あたまの整理箱』『マイライフプランの玉手箱』の作成」

団体名：全国マイケアプラン・ネットワーク（東京都府中市）

担当者：島村八重子

[入賞理由]

当事者が学習しながら自らのケアプランを作っていくこと、そのための具体的な方法やシートを開発し個人個人のエンパワーメントを引き起こし、結果として市民、介護家族、地域づくりの質の向上に寄与している成果は大きい。また、全国レベルでの学習型ネットワーク組織として今後の活動が期待できる。

[活動の概要]

全国マイケアプラン・ネットワークは、介護保険のケアプランを自己作成している利用者を中心に、趣旨に賛同する人たちのネットワークです。会員は、自己作成者あるいは経験者が50人ほど、その他に自分や身近な人の今後のためという人、ケアマネジャーなどの専門職、研究者、行政職員など合わせて、全国に約160人です。

2001年9月に発足以来、適切でかつ適正な介護保険給付を受けるに資するケアプランを立てるためにはどのようにしていけばいいかを模索、方法論を確立してきました。

その成果として、2003年にはワークシート式マニュアル「マイケアプランのための『あたまの整理箱』」を制作しました。その人らしいケアプランを立てるためのさまざまな情報を整理し、思考過程を明らかにして、根拠を分かりやすく伝えるためのツールです。

私たちは活動を通して、要介護者の生活歴や特性をよく理解している人がケアプランの作成に主体的にかかわることの大切さを実感しました。これはケアマネジャーに依頼していても同様です。マイケアプランとは、ケアプランをケアマネジャーに丸投げせずに、当事者がしっかりと主体的にかかわって立てることです。特に、認知症の要介護者に関しては、それまでの人生、嗜好などを理解している人が中心となってケアプランを立てることで、その人にあったケアのあり方を提案することができます。

また私たちは介護を通じて、誰もが前もって、“認知症になっても大丈夫なように、「自分」や「周りの環境」を整えておく”ことが大切だと気づきました。そのためのツールとして、2005年には『マイライフプランの玉手箱』を制作しました。

元気なうちから、過去を振り返り、今を分析し、将来の展望を考えるためのツールです。もしも認知症を含めた要介護状態になった時には、そのままケアプランの土台となります。

市民一人ひとりが、認知症を自分自身の問題として考え、認知症になっても自分らしい生活が送れるように自分自身や周りの環境を整備し、準備しておくことは、そのまま認知症になっても大丈夫なまちづくりにつながると確信しています。

7. 本日のまとめ

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005実行委員長 長谷川和夫

本日は「認知症を知り、地域を作る 10 ヶ年」の初年度としての「認知症を知る1年」の報告会とあわせて、「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005の表彰式・地域活動報告会が行われたわけですが、私はこの2つの事業が互いに影響しあって展開されていくことを期待しております。

「認知症を知る」というときの「知る」はまず知識でございますから、認知症を理解することが大事です。そのために5年間に認知症サポーターを100万人にするというプロジェクトが進行しております。

そして、もう1つの「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンでは、拠点を中心とした町づくり活動の非常に先駆的な発表が本日ございました。いま、拠点の「点」と申しましたが、町づくりということになってまいりますとこれが「面」になってまいります。点から面に認知症のサポートのプロジェクトが進行しているということであろうと思います。この面がどんどん広がっていけば、日本全体が認知症になっても安心して住める社会、文化を創ることになりまして、長寿社会のトップランナーである日本が世界のひとつのモデルとなるのではないかと考えております。

制度が変わったり、世情や私たち自身も変わっていきますが、古典というものを参照しながら初心に戻り、私たち自身を励ましていくことも大切なのではないかと思っております。古今東西の古典の中でベストセラーであります「新約聖書」のマルコ伝第4章にはこういう言葉があります。

「(からし種は)土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る」

本日発表された方々はひとつひとつの種をまいてくださっているわけです。

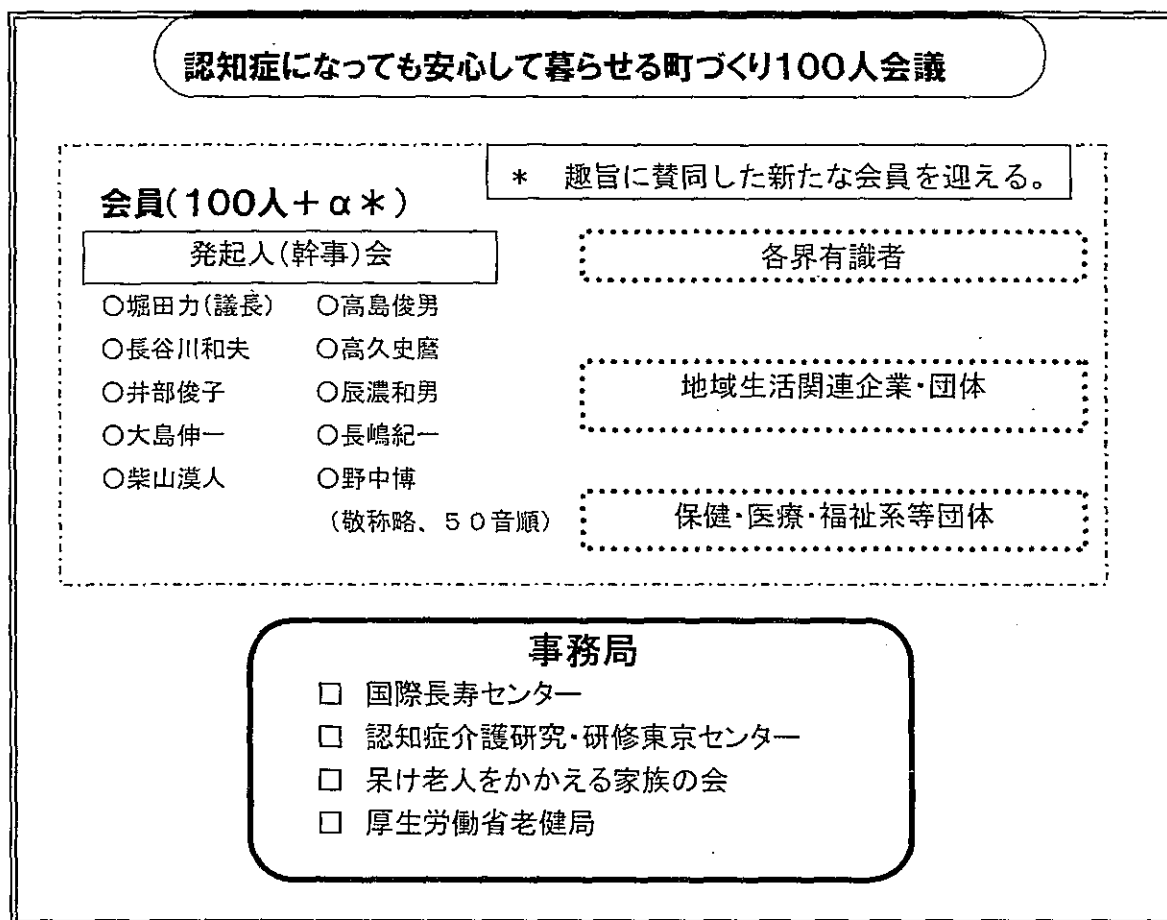
それがやがて大きな実りを遂げて、認知症になっても安心して暮らせる社会を私たちは作ろうではありませんか。



【100人会議の趣旨・役割】

100人会議は、厚生労働省が提唱する「認知症を知る1年」キャンペーンの趣旨に賛同し、その推進を応援する民間の個人や団体を中心とした運動体である。

具体的な役割は、メンバーそれぞれの立場を活かしながら、認知症に関する知識や情報の普及、認知症になっても暮らし続けられる地域づくりを応援することなどである。



【認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議宣言】

- 1 わたしたちは、認知症を自分のこととしてとらえ、学びます。
- 2 わたしたちは、認知症の人の不安や混乱した気持ちを理解するよう努めます。
- 3 わたしたちは、認知症の人が自由に町に出かけられるよう、応援します。
- 4 わたしたちは、認知症の人や家族が笑顔で暮らしていけるよう、いっしょに考えます。
- 5 わたしたちは、市民や企業人としてできることを行い、安心して暮らせる町づくりをめざします。

【「認知症を知る1年」キャンペーンの事業】

- 「認知症サポーター100万人キャラバン」による住民・職域・学校講座
- 「認知症でもだいじょうぶ町づくり」キャンペーン2005
- 認知症の人「本人ネットワーク」支援
- 認知症の人や家族の力を活かしたケアマネジメントの推進

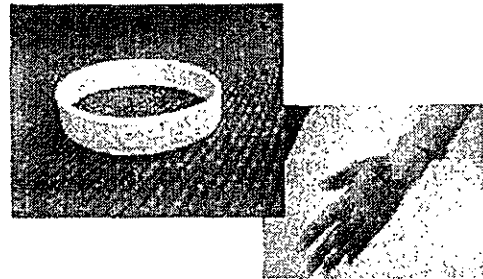
このほか、

認知症予防と早期発見による継続的な地域ケアマネジメントシステムの構築、
介護サービスの質を向上させるための人材育成、
認知症の人の権利を守り尊厳を支える取り組み、などを推進していく。

【認知症サポーターについて】

「認知症サポーター100万人キャラバン」による住民・職域・学校講座にて、
認知症についての正しい知識、認知症の人への適切な対応のしかたを学んだ方を
いいます。認知症サポーターには、その証として、
「オレンジリング」をお渡します。

●オレンジリング



日常の暮らしの中で、学んだことを生かすよう、
自分のできる範囲から一認知症の人やその家族に
温かい目で接することから、周囲の人への啓発活動、
認知症の人やその家族への支援—など、できること
を見つけて行動を起こしてください。

認知症サポーターの中から、新たな町づくりの担い手
が輩出されることが大いに期待されています。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">① 認知症に対して正しく理解し、偏見をもたない。② 認知症の人や家族に対して温かい目で見守る。③ 近隣の認知症の人や家族に対して、自分なりにできる簡単なことから実践する。④ 地域でできることを探し、相互扶助・協力・連携、ネットワークをつくる。⑤ まちづくりを担う地域のリーダーとして活躍する。 |
|--|

【シンボルマークについて】



青:本人
黄、オレンジ、赤:
人、地域、制度

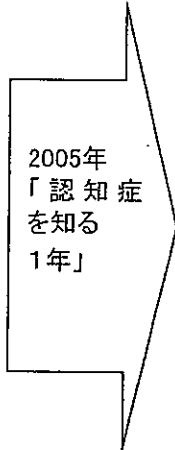
※青い丸が本人を
あらわしています

本人が内に秘める輝き (=自分らしさ) をみんなで支えていく、 という意味を こめています

【「認知症を知り 地域をつくる10ヵ年」の構想】

(平成17年4月の厚生労働省資料を基に作成)

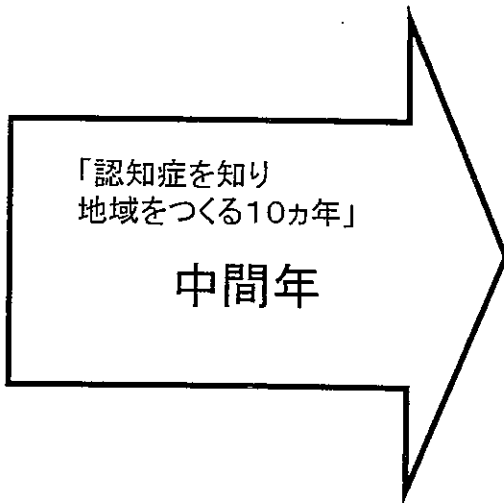
2005年4月スタート



2005年度 到達目標

多くの住民が認知症について以下のことを知り、各自なりの対応・支援を考えていくための素材づくり、地域づくりのモデルができている。

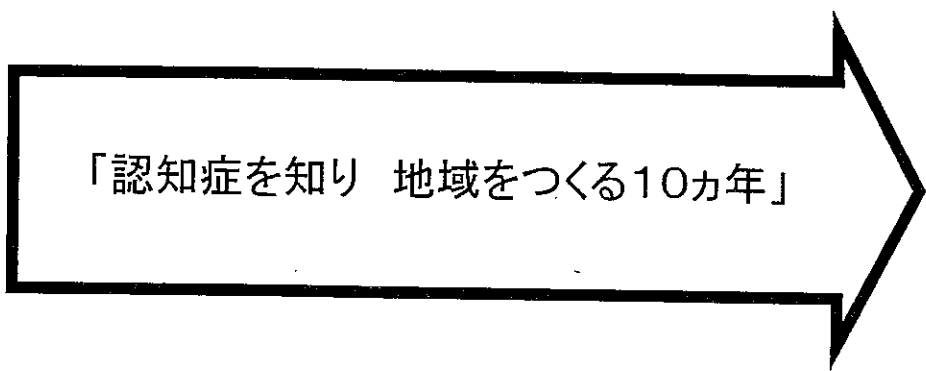
- ・認知症の特徴
- ・認知症になっても自分らしく暮らせること
- ・認知症予防に有効と思われること
- ・認知症になったのではないかと思ったときの対応
- ・認知症になったときの対応
- ・認知症の人の暮らしを地域で支えることの重要性和可能性



2009年度 到達目標

- 認知症について学んだ住民等が100万人程度に達し、地域のサポーターになっている。
- 認知症になっても安心して暮らせるモデル的な地域（以下のような地域）が、全国各都道府県でいくつかできている。

- ・認知症であることをためらいなく公にできる。（早期発見・早期対応）
- ・住民や町で働く人々による（ちょっとした助け合い）が活発。
- ・予防からターミナルまで、関係機関のネットワークが有効に働いている。
- ・かかりつけ医を中心とした地域医療ケアチームがきめ細やかに支援している。
- ・徘徊する人を町ぐるみで支援している。



2014年度 到達目標

認知症を理解し、支援する人（サポーター）が地域に数多く存在し、すべての町が認知症になっても安心して暮らせる地域になっている。

参考資料4

【認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議会員名簿】

平成18年2月末日現在
(敬称略、50音順)

幹事 (発起人) 計10名	井部俊子(検討会委員・聖路加看護大学長)、大島伸一(国立長寿医療センター総長)、柴山漠人(認知症介護研究・研修大府センター長)、高久史磨(検討会委員・自治医科大学長)、高島俊男(検討会委員・エッセイスト)、辰濃和男(検討会委員・エッセイスト)、長嶋紀一(認知症介護研究・研修仙台センター長)、野中 博(検討会委員・日本医師会常任理事)、長谷川和夫(検討会委員・認知症介護研究・研修東京センター長)、堀田 力(議長:「痴呆」に替わる用語に関する検討会委員・さわやか福祉財団理事長)
各界有識者 計12名	足立 啓(和歌山大学システム工学部教授)、生島ヒロシ(キャスター)、永 六輔(放送タレント)、落合恵子(作家)、小室 等(ミュージシャン)、高野範城(日本弁護士連合会 高齢者・障害者の権利に関する委員会委員長)、立松 和平(作家)、羽田澄子(映画監督)、日野原重明(聖路加国際病院理事長)、松井久子(映画監督)、村田幸子(福祉ジャーナリスト)、吉行和子(女優)
地域生活 関連企業・ 団体 計21団体	全国医薬品小売商業組合連合会、全国銀行協会、全国公団住宅自治会協議会、全国高等学校長会、全国石油商業組合連合会、全国農業協同組合中央会、全国連合小学校長会、全日本中学校長会、電気事業連合会、社団法人 日本観光協会、社団法人 日本ガス協会、日本商工会議所、社団法人 日本水道協会、日本生活協同組合連合会、日本製薬団体連合会、社団法人 日本セルフ・サービス協会、社団法人 日本専門店協会、財団法人 日本博物館協会、社団法人 日本フランチャイズチェーン協会、社団法人 日本ボランティア・チェーン協会、日本労働組合総連合会
保健・医療 ・福祉系団 体等 計53団体	介護相談・地域づくり連絡会、玩具福祉学会、高齢社会 NGO 連携協議会、NPO法人 高齢社会をよくする女性の会、国際長寿センター、社団法人 コミュニティネットワーク協会、財団法人 さわやか福祉財団、社団法人 シルバーサービス振興会、社団法人 成年後見センター・リーガルサポート、全国介護支援専門員連絡協議会、特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター、全国在宅介護支援センター協議会、全国市長会、社会福祉法人 全国社会福祉協議会、全国知事会、特定非営利活動法人 全国痴呆性高齢者グループホーム協会、全国町村会、全国マイケアプラン・ネットワーク、全国民生委員児童委員連合会、財団法人 全国老人クラブ連合会、全国老人デイケア連絡協議会、社団法人 全国老人保健施設協会、宅老所・グループホーム全国ネットワーク、社団法人 長寿社会文化協会、社団法人 地域医療振興協会、社団法人 日本医師会、社団法人 日本ウォーキング協会、社団法人 日本介護福祉士会、社団法人 日本看護協会、日本言語聴覚士協会、日本ケアマネジメント学会、社団法人 日本建築学会、日本公証人連合会、日本高齢者虐待防止学会、社団法人 日本作業療法士協会、有限責任中間法人 日本在宅介護協会、社団法人 日本歯科医師会、社団法人 日本社会福祉士会、日本精神衛生学会、社団法人 日本精神科病院協会、日本成年後見法学会、日本赤十字社、日本認知症ケア学会、社団法人 日本薬剤師会、社団法人 日本理学療法士協会、日本療養病床協会、日本労働者協同組合連合会、日本老年看護学会、福祉自治体ユニット、財団法人 ぼけ予防協会、社団法人 呆け老人をかかえる家族の会、有限責任中間法人「民間事業者の質を高める」全国介護事業者協議会

※協力:日本経済団体連合会

合計:96 団体・個人

第2回認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議(「認知症を知る1年」報告会)
「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2005 表彰式・地域活動報告会

報告資料

認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議事務局 国際長寿センター
2006年3月

禁無断転載